『聞いて信じてわかったから』ヨハネ4:39-42

4:39 さて、この町からきた多くのサマリヤ人は、「この人は、わたしのしたことを何もかも言いあてた」とあかしした女の言葉によって、イエスを信じた。
4:40 そこで、サマリヤ人たちはイエスのもとにきて、自分たちのところに滞在していただきたいと願ったので、イエスはそこにふつか滞在された。
4:41 そしてなお多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。
4:42 彼らは女に言った、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分自身で親しく聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」。

●序論
あのサマリヤの女性の男性遍歴を言い当てたイエスさま。そうして、その女性を裁くのでも、その女性に恐れを抱かせるのでもありませんでした。

このサマリヤ女性は、その見知らぬユダヤ人の男性を主と呼ぶようになり、神の預言者のひとりだと思うようになり、そして最後にキリストであると告げられた時、彼女の中で大きな変化、大きな確信が与えられています。
4:28 この女は水がめをそのままそこに置いて町に行き、人々に言った、
4:29 「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんなさい。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。
まさにここに「聞いて信じてわかったから」という姿があります。

〇本論
Ⅰ．サマリヤの女性の体験
教団信徒向けサイトAG fellowshipの中の、先週掲載された記事。
現在沖縄の嘉手納教会の牧師をしている神山美由記先生の手記。
タイトルが「にげて、さがして、見い出され…」というものでした。
先生ご自身のある意味暗い部分の体験を紹介して、そこでのイエスさまとの出会いを証ししていました。
そう、かくいう私も逃げて、投げ出してしまった経験のある一人です。２０代前半のころ、心身ともに限界を超えて、会社に行くことができなくなってしまい、落ち着く場所に身を寄せていた期間がありました。会社に行くと思うと胃が痛み、吐き気がして、心療内科を受診し、症状も具体的に訴えることができず、ただただ先生の顔を見るなり、（当時すでにいい大人でしたが）大号泣してしまいました。私のそんな姿を見て、お医者さんは即座に「もう大丈夫、心配しなくていいよ。ゆっくり休んでくださいね。」と言ってくれたのです。その先生の言葉に心底ホッとしたものの、それまで学生時代に不登校の経験がなかった自分にとってこの件は心に大きな影を落としたのです。自分だけが時計の針が止まっているように感じ、周囲から取り残されたように感じる休養の期間は、それまでの人生の中でもっとも暗く、苦しい時間でした。しかし、「逃げた」ように思えるその時

間は「さがす」旅路の大切なキッカケとなったのです。それまでの毎日朝６時台に家を出て、夜２２時に帰宅する生活から一転。ゆっくり起床し、昼間は散歩して、実家の手伝いをしたりしながら過ごし、夕方また散歩に出かけ、夜も早めにベッドに入る。そんな生活が二ヶ月ほど続きました。十分な食事と睡眠で、疲弊していた心身は次第に回復に向かいました。

美由記先生は、そういうどん底の中で、公園のブランコで揺られながら神さまとの対話をしたと言います。そしてそこで「あなたは、今、わたしの隣にいる」という声を聞き、自分しかいない、孤独を感じていた失意の中で、実はそばにいてくださったイエスさまに気づかせていただいたというのです。

そういう体験を経て、先生は十字架を語ってくださっています。

聖書に登場する人物のほとんどは、華々しい活躍を経て、山のてっぺんにいる人たちではなく、それぞれ少なくとも一度は転がりおちて、深くて暗い場所を知っている人たちです。　　なぜでしょう。それは、イエス・キリストの十字架が頑張って登りつめた山のてっぺんにあるのではなく、私たちが普段行きたがらないような一番低いところに静かにそびえたっていることを示すためです。

あのサマリヤの女性はお昼の１２時ごろに周囲の人の目を避けて井戸に来ました。

ある意味生活そのものが逃げて過ごすような時間でした。

しかし、イエスさまは、そんな彼女に声をかけ、心に触れてくださったのです。

彼女にとってその出会いは自分が望んだわけではない。けれども、自分の心の奥底で最も欲していた出会いであり、渇きであったこに気づかされた経験でした。

そんな霊的な感動を経て、彼女は町に知らせに行ったのです。

そこに置き去られた水がめが、最も印象的に彼女の変化を象徴するものでしょう。

こうやって、彼女の信仰はイエスさまの言葉によって信じる者とされ、信仰の感動に至っているのです。まさに「聞いて信じてわかったから」出て行ったのです。

Ⅱ．その女性の言葉を聞いたから

改めて29節に女性の感動表現はこう記されています。

「…さあ、見にきてごらんなさい。もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。

そうして、サマリヤの人たちは信じたと。

4:39 さて、この町からきた多くのサマリヤ人は、「この人は、わたしのしたことを何もかも言いあてた」とあかしした女の言葉によって、イエスを信じた。

わたしが学生時代に、友人たちを京都の七條基督教会へ連れて行ったことがあります。そのとき、神さまの不思議がありました。

行くと、その教会には、夕拝時、中高生の青年たちなど若い人たちを中心に集まっていて、その時村上牧師がお話したメッセージも、わたしには今も残っています。

実は、この夕拝。じつは、その日から始まったばかりの集会であったということでした。つまり教会側から見るなら、7時過ぎからの夕拝（当時伝道集会として始めたら

しい）を始めたぞ、そしたら、初対面の知らない学生たちが連れ立ってやってきたぞ…ということだったのです。
神さまは、不思議をなさいます。すべては、神さまの御手の中です。

あのサマリヤの女性がイエスさまとあの井戸のそばで出会ったことに始まり、その感動が、町の人々に伝わったこと、彼らが続々とイエスさまのもとにやってきたこと。
すべて神さまの御手の中にあったのだとわかります。

人々はああ、本当にそういう人がいた…ということでおしまいにしませんでした。
4:40 そこで、サマリヤ人たちはイエスのもとにきて、自分たちのところに滞在していただきたいと願ったので、イエスはそこにふつか滞在された。
そうして彼らは、信じることへの更に一歩前へ進んだのです。

Ⅲ．イエスの言葉を聞いたから
:40 …イエスはそこにふつか滞在された。
:41 そしてなお多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。
:42 彼らは女に言った、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分自身で親しく聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」。

彼らは、その言葉を親しく聞く機会を得たことで、彼らは更に自分で確信を得ることができたということですね。のちの使徒パウロはこう語っています。
ローマ10:17 したがって、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。
先週、故松尾明洋兄の手記から、彼の信仰、そして教会に導かれるきっかけの一つが、クリスチャンに変えられたお父さんの姿であったということを紹介しました。
その信仰は、さらにイエス・キリストのことばを聞くことで、深められていきます。
彼が「主を受け入れ、洗礼を受けたことです」と題して紹介したエピソード。
ある日の礼拝の時に聞いた、マタイによる福音書のイエスさまのたとえ話。明かりを用意して花婿を待つ十人のおとめたちのお話を聞いて、不思議な感動を経験したというのです。彼曰く、
…だから目を覚ましていなさい」と語られるのを聞いた時、自分でも知らずに涙が流れ落ちるのです。これは、今でもあの時の気持ちの高ぶりが、折に触れ時々思い出される経験です。
その礼拝の中で神さまは、その言葉を通して、彼に触れてくださったのです。
それは信じることで、さらに開かれていく霊的な気づきと感動の経験となっていたことがわかります。それは狂信や妄信といったものではありません。
信頼することで深められる、神の恵みの世界です。
ローマ1:17 神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。（だから）これは、「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである。

〇最後に

:42 彼らは女に言った、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分自身で親しく聞いて、この人こそまことに世の救主であることが、わかったからである」。

とても重大な信仰の告白です。　彼らの信仰の目は開かれて、このイエスさまこそキリストであるとわかったということでしょう。

この物語を通して２つの自分自身が変えられた信仰の感動を思い見ています。
-ひとつは、あの女性です。その女性は自分が伝えることで、人々がイエスさまのもとに来、さらに深くイエスさまを知ることができたという感動を得ています。
-もう一つは、サマリヤの人々です。イエスさまを救い主キリストであると「わかった」感動を、の女性に伝えることができたことも感動なのです。
それぞれの違いを過去の隔たりを埋めるキリストの福音のもとで喜びを共有しているありさまです。

その背景に、神さまの不思議な御手があったと振り返ることができます。
人目を避け、逃げていたあの女性のありさまは、神さまの目には隠れていませんでした。…わたしは失敗た、だから逃げてしまった、そんなありさまさえも、神さまは一人にしておられない。　わたしはあなたもとに行き、あなたと共にいると言ってくださるお方に出会うことができるのです。

それが今もわたしたちにも臨み、現実の祝福となるイエス・キリストの物語です。
このキリストの物語は２千年前に終わったのではありません。今のわたしたちの、弱さや悩みのどん底で十字架を示して、わたしたちの人生を癒してくださるお方です。

あのサマリヤの女性の姿がわたしの姿。さらにそんな女性の言葉を聞いて、立ち上がってイエスさまを求めたあの人々のありさまが、わたしたちの姿だ、そう自分たちを重ねて、感動を共有できるならばどれほど幸いなことでしょう。
実にそれが今を生きるわたしたちの教会の姿だと知っていただければ幸いです！